

シリーズ 私の一冊の本

国際関係学部 坂巻静佳 先生

高野秀行著 『放っておいても明日は来る 就職しないで生きる 9つの方法』

閲覧室2階 366.29/Ta47

本の雑誌社 出版

大学4年生の春、私は就職活動をしていました。特段やりたいこともなければ、特段目指す会社があるわけではなく、いま思うと何も考えていませんでした。しかし、とにかく来年の春からの収入源と居場所を確保しなければという焦燥感で、よく知らない会社に応募しては、知らない内に落とされたり、あからさまに落とされたりして、泣いて泣いて落ち込んで、この先どうなるのかと暗い毎日をおくっていました。その時の自分が出会っていれば、そう思ったのがこの本です。

この本は、作家の高野秀行氏が自分のお知り合いの方にこれまでの人生を伺った対談をまとめたものです。ここに描かれている人生は予想だにしない強烈なものばかり。農学部卒業後就職するはずのマレーシアの会社が就職前になくなり、引くに引けずに行ったマレーシアで職を転々としたのち、薬用植物調査会社を設立、生物資源ビジネスを展開しているひと。日本で会社勤めをしていたのに、キックボクシングにのめりこみ、タイに行って、キックボクシングに似たムエタイの選手になってしまったひと。会社を辞めて旅行に行った沖縄にそのまま住みつき、現在沖縄で映画をつくっているひと。職を転々とした後、ミャンマーで欧米旅行会社向けの边境専門現地手配会社を起業したひと。米国の美術大学を卒業した後、親友にひきずられて嫌々行ったバンコクでバンドを結成したことを契機に、音楽でたべていくことになったひと。会社を辞めて作った映画館が閉館、その後ライターになり、ピエンチャンにカフェを出店したひと。NGOで派遣されたチャドからの帰国後、その報告のイベントで訪れた屋久島にそのまま住み着き、エコツアーガイドになったひと。学生運動に参加して逮捕・投獄されたため韓国で就職のあてがなく日本に留学、帰国後起業した企業の倒産を経て、日本の本を翻訳する出版エージェンシーを設立したひと。以上の説明では到底説明し尽くせない、予想を裏切る突拍子もない話の展開に、頁をめくる手が止まりませんでした。

読み終わった瞬間、ここで語られている生き方は私には無理だと思いました。このような人生は私にはありえない。平凡で安定した予測可能性の高い人生を生きるために精進しようと心に誓いました。しかし、他方で、こういう生き方もあるのか、それでもたべていけるのかとぼんやりと思いました。私が目にし、想像しうる世界は自覚している以上に狭い。私が予想し、思い描く人生は、豆粒のように小さな「私の世界」のなかで私が考えた生き方でしかない。想定していたラインからドロップアウトしても、世界はそれでは終わらない。想定していなかったラインが続いていく、なるようになる、ただそれだけなのです。

高野氏はあとがきでこう書きます。「さんざんユニークな人間のユニークな生き方を紹介しておいてなんですが、できれば普通に生きるのがいいと思う。……だが、もし普通の人生からドロップアウトしてしまい最悪こういう人生になる—と思ったらどうだろうか。……これが『最悪』となれば、『最悪』も意外に悪くない。」

大学4年生の私がこの本を読んでも、きっと「ここで語られている生き方は私には無理だ。」と思ったことでしょう。そしておそらくもっと真剣に就職活動に取り組んだに違いありません。そうだとすると、この本で繰り広げられる予測不可能な人生の数々は、僅かかもしれないけれども当時の私を当時の「私の世界」から解放し、少しは楽に就職活動ができるようにさせてくれたのではないかと思います。